

追放された最強聖女は、

街でスローライフを送りたい！ 2

登場
人物紹介

アンナマリー

侯爵家の令嬢。
アンリとの婚約の
噂がある。

クロード

王太子でアンリの兄。
リーナたちに
魔物の追跡を命じる。

レストウィック

魔導士団の師団長。
見た目は子供の
性悪(?)エルフ。

フェリシア

王宮付き魔導士。
リーナの良き友人。

ジュリアン

アンリの従者で
フェリシアの甥。

シャルル

聖剣に選ばれし勇者。
魔物に体を乗っ取られ
カナエと共に失踪した。

カナエ

異世界から来た女性。
リーナの代わりに
シャルルに同行した。
その目的とは――?

みーちゃん

ミケちゃん

リーナ

聖女と呼ばれる治療師。
幼馴染の勇者シャルルに
いきなり追放された。
前世の記憶を持ち、
一部の動物と会話できる。

アンリ

リーナの幼馴染。
王の私生児で伯爵位を持つ。
リーナやシャルルと
同じ孤児院で育った。

目次

プロローグ	始まりは、春の風	7
第一章	新たな出会い	16
第二章	役者は出揃った	56
第三章	花はどこから来たか	115
幕間	誰がための、茨 <small>いばら</small>	158
第四章	記憶の欠片 <small>かけら</small>	165
第五章	前夜祭	228
第六章	花に染 <small>し</small> む	259
エピローグ	あざやかに、前を向いて	289

プロローグ 始まりは、春の風

「久々に戻ってきたけれど、王都はにぎやかだね！」

私——リーナ・グランは空に向かって両手を上げて、大きく背伸びをした。

王都の地図でいう中心には、祝祭や式典で使われる広場があり、その広場を大きな道がぐるりと囲んでいる。

初代国王の名を冠した美しい広場では、祝日の今日に相応しくあちこちに出店が並び、人と活気にあふれていた。

背伸びをして一息ついた私は、その様子を物珍しげに見回した。王都に来たことは何度もあるんだけど、こういった観光的なことをするのは初めてだ。

「貴女も元気ね。先週戻ってきたばかりなのだし、少しゆっくりしたらいいのに」

「だって今日はいい天気だし！」

私は同行者の魔導士——フェリシアにこたえた。アンガスの街から王都に帰還してようやく一息つけたのは、帰還から三日が経った頃だった。

私は大陸の中央に位置するこのハーティアという王国で治癒師をしている。治癒師とは、人を癒いゃ

することが出来る異能を持つ人の総称だ。

つい最近まで、この能力を活かして同じ孤児院出身の勇者シャルルとパーティを組み、魔物が出るといふアンガスの街のダンジョンへ派遣されていた私。

だが魔物と出会って負傷をした挙句に、シャルルと仲違いをし、パーティを追放されてしまった。ひどい扱いに腹を立てた私は、彼らのことは全て忘れて、街でスローライフを送りたい！

——なんて思っていたんだけど。

そう、うまくは事が運ばないらしい。

アンガスの街でギルドの最上階に間借りしつつ、可愛い猫二匹と楽しい生活を送っていたのは、ほんのつかの間。

私を追放したシャルル一行と、彼らのパーティに新しく加わったカナエという女性に不穏な動きがあると告げられ、私は彼らのあとを追った。

パーティメンバーはダンジョンの魔物にひどい目に遭わされ、シャルルは魔物に体に乗っ取られていたことが判明した。

結局私の力が足りずに、シャルルとカナエ、それからシャルルに乗っ取った魔物を取り逃がしたのは……二週間ほど前のこと。

私はアンガスで再会したもう一人の幼馴染で、国王の私生児でもあるアンリ・ド・ベルダン伯爵と共に王都へ戻ってきたのだった。

そして今は、元冒険仲間のフェリシアの家に居候をさせてもらっている。

「気分転換は必要よね」

その意見にフェリシアも同意してくれたので、私達は出店をのんびりと観察しながら歩く。

広場の中央にある野外の劇場に人だかりができていた。二人で覗くと、初代国王の建国をテーマにした劇が上演されている。

ハーティアの国民なら誰もが一度は見たことがあるものだ。

初代国王が聖剣で敵の軍を追い払い、悪い魔物も殺して王妃様を救い出し、彼女と幸せになる。

「ハーティアに恵みを！」

国王役の役者が高々と剣を掲げて宣言する。ちょうど魔物を倒したところらしい。黒い毛むくじやらの着ぐるみが舞台の上に転がっている。

観客は一斉に拍手し、わあっと歓声が沸く。

王妃役の女性が国王役に駆け寄った。

「ああ、陛下。助けていただきありがとうございます。どうか私を救ってくださいましたように、この国の民もお守りください……！」

こうして悪者を倒した王様とお姫様は、いつまでもいつまでも平和に暮らしました。そういう話なのだ。

誰もが知っている建国の歴史だけど、本当はどうだったのかなあ。

午前中ずっと広場を散策し、気分転換できた私は、フェリシアに聞いてみた。

「フェリシアは午後は仕事だよ？ 私もいつまでものんびりはしてられないし、図書館にでも

行こうかなと思っっているんだけど……」

「図書館？」

「アングスの伝承について少し調べてみたいなって。フェリシアの権限で王立の図書館に入れてもらえたりするかな？」

フェリシアはそれなら、と言って紹介状を書いてくれた。

王宮付き魔導士の紹介状があれば王立の図書館にも入館できるらしい。私はフェリシアにお礼を言っつて、図書館へと向かった。

たどり着いた図書館は地下にあり、ひんやりとしていた。

ちょうど昼食時だからか、貸出カウンターのらしき場所は無人だ。探している本はどこにあるかな？ と書架を眺めていたら、背後から呼び止められた。

「お嬢さん、何かお困りですか？」

振り向くと品のよい青年が立っていた。金の髪は明るく目立っているけれど、瞳の色は周囲が暗くてよく見えない。

職員さんだろうかと思いつつ、私は彼に紹介状を差し出した。

「魔導士フェリシアの紹介ですか。貴女のお名前は？」

「リーナ・グランと申します。古書を閲覧したいのですか」

私が事情を話すと、彼は「ああ、それなら」と奥の部屋を示してくれた。

「聖女と名高いリーナさんが、歴史にもご興味をお持ちとは」

青年は私を知っているようだった。

「聖女だなんてとんでもない」

その呼び名に私はあまり相応しくない。ただ、他の人よりちょっとばかり治癒が得意なので、一部の人からは『聖女』と呼ばれている。

青年の表情には、好奇心だけで邪気はないけど、なんだろう……距離感も遠慮もないな。

私が「えへへ」と笑って誤魔化せば、青年はにっこりと微笑み、それ以上は深入りせず目当ての本の場所を教えてくれた。

「ご親切にありがとうございます」

「いいえ、リーナさん。またいずれお会いしましょう」

またいずれ？

何か引つかかる言い方だなと思っただけど、彼はさっと姿を消してしまっう。

私は気を取り直して本棚の林に足を踏み入れ、その日は一日中、アングスの歴史書探しに没頭した。

次の日。

午前の勤務を終えたフェリシアはため息をつきつつローブを脱いだ。

「昨日も思っただけれど、久々の出勤は半日だけでも疲れるわ」と簡素な部屋着をまもって髪を下ろ

した姿は、同性から見ても色っぽい。

私は王都に家を持っていない。以前シャルルと王都にいたときは国教会が用意してくれた屋敷に宿泊していたんだけど、なんとなく戻る気になれずにいたら、フェリシアが私を家に誘ってくれたのだった。

フェリシアの屋敷は王宮から少し離れた閑静な高級住宅街にある。二階建ての建物で、一階には大きめのリビングとキッチンやお風呂、それにフェリシアの部屋と可愛らしい庭がある。二階には寝室が二つあり、私はその一つを借りていた。

古いから安かったのよ、と言いつつも内装はリノベーションされていて全く古さを感じさせない。さすが王宮魔導士、リッチだなあ。

「いつまでも居候じゃ悪いし、ギルドに登録しようかなあ。王太子殿下にいつ会えるかもわからないし」

「ギルドに登録する前に、王太子殿下から王宮勤めをしないかっってお誘いがあると思うけど？」

「それは遠慮したい、です。……きつと魔物のことでお叱りを受けると思うし。とはいえ、会わなくちやいけないんだよね……」

私はちよつとため息をついた。

アンガスであつた色々なことのご報告を、早くしてしまいたいな。そしてシャルルを探しに行きたい……その手がかりがあるかはわからないんだけど。

しかし、『シャルルの仲間ではないただの治癒師』の私には、王太子殿下への謁見の順番などは

かなか回つてこない。

周囲から聖女つて言われても、やっぱり私は平民だもんね、とちよつと胸の辺りがチクリとする。アンリ、ちゃんと王太子殿下とお話しできたかな。

私生児とはいえ弟だから、約束なんか取り付けなくてもすぐに会えるだろうけど……

「王太子殿下はお忙しい方だから。でも明日か明後日には会えるわよ」

「うん！ どんな方が楽しみな」

私は内向きになりそうな気持ちを振り払うように、元気に返事をした。無駄に時間があるのはよくないな、うだうだ考えてしまう。

「お昼ご飯にする？」

「あら、作ってくれるの？」

「居候の身ですから。なんなりと、マダム！」

「そうねえ、何をお願いしようかしら」

フェリシアは何事においても器用な人だけれど、料理だけは壊滅的に苦手だ。

じゃあ、準備を……と思つたところで、コツコツと硝子窓から音がした。

そちらを振り返ると、窓辺に綺麗な青い鳥がちよこんと止まり、紙を啜えて待っている。

「……伝令だわ」

フェリシアが窓を開けると、青い鳥はふわりと飛んできて彼女の長い指に乗る。その鳥がキラキラと光つて霧散したかと思つたら、代わりに一枚の紙が現れた。

「わあ！ 綺麗」

初めて見る魔法に私が感動している横で、フェリシアはこめかみに手をあてている。

「上司からの呼び出しよ。確かに綺麗かもしれないけれど、前時代的な呼び出し方は勘弁してほしいわ。石版タレットがあるんだから、そちらで連絡すればいいのよ！」

「えー、情緒があつていいのに」

「非効率的なのは嫌いなよ！」

フェリシアは紙をぐしゃりと握り潰した。

苦々しげだなあ。手紙を送る方法がどうかよりも、送ってきた相手のことが苦手みたいだ。

「リーナ、ごめんなさい。上司のところへ行かなきゃいけなくなつたわ。よければ貴女も来ない？」

「え？ 私？」

王宮付きの魔導士であるフェリシアの上司って……！

「王太子殿下の、直属の部下の一人よ。……貴女に会いたみたいなの。お昼を一緒にどうか、つて……」

フェリシアは脱いだローブを再び羽織はり、はあっとため息をついた。

「私が屋敷に戻ってくるタイミングを見計らつて、鳥を送ってきたんだわ……まさか、この屋敷を監視しているんじゃないでしょうね？ どこかに、監視の術が……？」

なんかブツブツ言いつつ、一気に疲れた様子を見せているぞ。フェリシアの上司ってどんな人か興味があるな。

「行きます！」

こうして私はフェリシアと共に、思わぬ形で王宮（の外れ）に向くことになった。

「王都の魔導士団って、どんな団体なの？」

王宮へ向かう道すがら、私はフェリシアに尋ねる。

彼女は王太子殿下が束ねる魔導士の集団のうちの一人なのだ。

フェリシアはちよつと肩を竦めてみせる。

「魔導士の団体と言つても、三十人はいないのよ。近衛騎士団や飛竜騎士団の半分にも満たない、少ない集まり」

「少数精鋭なんだ？」

「と言えは聞こえがいいんでしょうけどね？ 王立の魔導士団はそもそも王族の……さらに言うなら代々の王太子殿下の私兵なの」

フェリシア達の直属の上司は王太子殿下、すなわちアンリの兄上だと聞いている。

「王太子殿下がおおらかな方だから、私達は概ね自由にさせていただいているわ。……悪い人達ばかりでもないけど、変わり者が多いのが難点なのよね……」

なんだか聞き捨てならないセリフだ。

私が不安げな表情で美魔女を見つめると、フェリシアは苦笑のような、もしくは悪戯を仕掛ける

前のような、なんとも複雑な笑いを浮かべた。

「言っておきますけどね、リーナ。私が貴女とシャルルの同行者に選出されたのは、王都にいる魔導士の中で一番常識的かつ温厚だからですからね？」

「……は、はい」

フェリシアは温厚で素敵な人だけど、ちよつぱり浮世離れはしている。

そのフェリシアが一番、常識的なのか……

「王都の魔導士は皆、変人ですから！ 何を見ても驚かないでちょうだい」

「……は、はい」

「ついでに言えば、私の上司が一番変態だから」

「変態」

「命令じゃなかったら、絶対会いに行きたくないわー！」

ぷりぷりと怒るフェリシアにすさまじい不安を覚えつつ、私は王宮の東門をくぐった。国王陛下やそのご家族の住む離宮から少し離れたところにある、苔むした二階建ての煉瓦作りが魔導士の詰所らしい。

「王宮のこんな外れにあるの？ 騎士団の宿舎の近くにあるのだとばかり」

「……上司に会えば理由がわかるわよ」

不安だけど、どんな人なのか楽しみだなあ、と思つて建物を見上げる。

フェリシアが二階の左端にある大きめの窓を指さした。そこだけ改修したのか、壁も窓も新しい。

「あそこが、我らの代表がいる部屋よ」

「さすがは代表の執務室だね！ 他の部屋とは壁の色が違うし、窓も大きい！」

「……あー、それはね。別に代表だから違うわけじゃないのよ」

「へえ？ そうなの？ じゃあなん……」
で？

と私が問う前に、建物から大声が聞こえてきた。大声というよりまるで悲鳴と怒号だ。

「おいっ！ また団長がやらかしたぞ！」

「伏せろっ！ 伏せろっ！ 全員退避っ！」

「きゃーっ！ また予算がーっ！」

私は「へっ？」と言いつつ声がする方を見た。

「リーナ！ 危ない！ 伏せて！」

「うえええ!?」

フェリシアの豊かな胸に押し潰されるように、私は草むらに転がる。

耳を塞いで！ と誰かが叫んだ。

何ごとお!? と思いつつも慌てて耳を塞ぐ。

ドオオオオオオオン!!

爆音が響いて、爆風で飛ばされそうになる。
ドンっ！ ドンっ！

小さな爆発音が背後から聞こえた。ひいつ！ 何これ!!

三十秒ほど瞼を閉じてから、恐る恐る辺りを窺う。するとフェリシアが団長の部屋だと教えてくれた場所を中心に、壁ごと部屋が吹っ飛んでいた。

そこからは魔導書だったと思しき紙が、まるで雪のようにヒラヒラと舞っている。

私は目を丸くした。

建物の惨状にもびつくりしたけれど、その部屋からふわりと飛ぶかのように、小さな人影が舞い降りてきたからだ。

——人が飛んでいる？

小さな人影は顎に手をあてて、ゆっくりと地面に着地すると、砂を払うかのような仕草で服のあちこちについていた火の粉を払った。

「……うまくいかないなあ、火力の調整を間違えた？ いや、鳥を呼ぶタイミングを誤ったのか？

鳥がまだ若すぎて、火のコントロールができずに暴発したのかな？ これがもう少し成熟した鳥だったなら……！」

ブツブツと意味不明な言葉を紡ぐ人影に、フェリシアが頬を引きつらせ、ついで目を吊り上げた。

「レストウィック！」

「ああ、フェリシア、よく来たねー」

「よく来たねじゃないでしょう！ なんなんですか、これは！」

「君が聖女を連れてくるっていうから、歓迎の意味を込めて、火の鳥を召喚しようとしたんだよ。失敗しちゃったけどね、はっはっは！」

聖女って私!? この惨状って私のせい!?

青くなつた私の横で、フェリシアは青筋を立てて怒っている。

「馬鹿言わないでください！ 団長！ 貴方じゃあるまいし、初対面で霊獣を呼び出されて嬉しい人間はいません！ 死人が出たらどうするんです！」

団長!?

私はフェリシアと対峙^{たいじ}している小柄な人物をまじまじと見つめた。銀色の髪に緑色の瞳、そして尖った耳。少年に見えるけれど、世慣れた視線だけは年齢を誤^ご魔化^{まか}しようがない。

エルフだ。しかも多分、純血の！

驚く私をよそに、団長……レストウィックと呼ばれた彼は真顔で頷く。

「大丈夫だよ、フェリシア。我が王宮魔導士団は全員、素晴らしく危機管理能力が高い。みんな火傷一つ負っていないだろう?」

その言葉に、私の背後にいる二人組の男性がぼそぼそと抗議する。

「……好きで危機管理能力が高くなつたわけじゃない」

「あんたがいつも、気まぐれに殺人的な実験をするからでしょうが！」

私はあらためて魔導士達の詰所を見つめた。

あちこちに修繕の跡があつて、しかもそれが団長の執務室の辺りに集中しているのは……レストウィックさんが今みたいな危ないことをするから、か。

「また！ また修理が必要じゃないですか！ 予算なんてないのに！」

「大丈夫だつて。予算がなくなつたら坊やの個人資産から捻出^{ねいしゅつ}すればいい」

「坊や?」

「王太子だよ、フェリシア」

「不敬なことを言わないでください」

にぎやかに言い合う二人を横目に、私はつま先を前に向けた。

首を傾げて、建物を観察する。

「……どうかした? リーナ」

気づいたフェリシアが問いかけてきたので、私はニコツと笑ってみせた。

「復元！ できるかも！」

「リーナ！ 貴女、そんな大掛かりな魔法を使つたら魔力が……」

「大丈夫。今壊れたばかりだもの。そんなに魔力は消費しないよ」

私は簡易的な陣を建物の前に描く。

本当は、建物をぐるっと囲んで描くのがいいんだけどな！

レストウィック団長は私の動きを興味深そうに見るだけで、止めはしなかった。

私は二人に背中を向けると、印を組んで呪文を唱えた。

手の中と、足下の魔法陣が淡く光る。

「復元せよ」

私の声に伝えて、爆風で散らばった煉瓦の欠片が宙に浮き上がる。魔導士達が呆気にとられているのを視界の端にとらえながら、私は命じた。

「無垢なる石よ。在りし時の姿を思い出せ。復元せよ！」

すぐに元通りになった壁を見上げて、ヨシと頷いてから、上機嫌で振り返った。

ギャラリィから感嘆の声と拍手が起る。

私はどうも！ と笑顔を振りまき、心配そうなフェリシアに『大丈夫』と手を振った。

魔物の魔力の影響で、大掛かりな復元をしても魔力の枯渇は感じない。

レストウィック団長が少し、口の端を吊り上げた。

なんだか満足そうなんだけど……わざと壊した、とかじゃないよね？ 若干不審に思いつつも、

ニコリと微笑まれてつられてしまう。

「噂には聞いていたが、貴女の魔力はすごいものだな。招きにに応じてくださって礼を言うよ、聖女殿」

「お招きいただきありがとうございます、レストウィック団長」

私達はとりあえず、友好的に握手を交わした。

「遠慮なく寛いでくれ、聖女リーナ」

復元した執務室に通された私は、お茶をごちそうになることにした。

しかし、足の踏み場もないなあ！

所狭しと並べられた、本、本、本……！

ブックタワーが何箇所もできていて、無事なのはソファの周りだけ。すごい部屋だな。

フェリシアは慣れているのか平然とし、エルフの少年（に見える）レストウィックも一人分だけ空いたスペースに器用に座っている。

全部魔導書なのかなーと思いつつきよろきよろ見回していると、小さな物音がした。

ギコギコと音がして……楕円形の陶器を二つ縦に繋げたような人形がこちらに向かってくる。

「人形が自動で歩いているの？」

『コンニチハ、お客サマ』

「喋るんですか!？」

「ちよつと特別製でね、さあ、お客様にお茶を出すんだ」

『ハイ、マスター』

人形は、先が三つに分かれた手のような器具を使って、器用に給仕をしてくれる。

「わあ！ すごい。これは魔力で動いているんですか？」

「そう、体は魔鉱石できてきているんだ。何故か僕の秘書はすぐ辞めてしまうことが多くてねー？ 仕方なく、この人形に雑事をさせているんだ」

ロボットみたい！

かっこいいなあと観察する私の横で、フェリシアが眉間に皺を寄せている。

「頻繁に爆発する執務室をお持ちの方なんて、秘書に逃げられて当然です。それで？ レストウイック、私を呼び出したのはなんの用件ですか？」

「アンガスでの諸々を報告してほしかったんだよ、君の口から少年（仮）は、しばらく遠くにいたのでね、と付け加えた。」

「ご報告が遅れて申し訳ありませんでした」

フェリシアが彼に説明するのを隣で大人しく聞いたあと、私はアンガスの魔物のこと、それから姿を消したシャルルとカナエのことも説明した。

レストウイックは私達の話聞いて、ふうんと顎に指を添えた。

「人の意識を乗っ取る魔物ねえ。厄介だな」

「そういうことができる魔物なんて、本当にいるんでしょうか……」

私が首を傾げると、彼は笑った。

幼い外見に反して緑の瞳は皮肉げで老成している。

レストウイックが片手を上げると、ロボット……と呼んでいいのかわからないが、給仕人形がとことこと歩いてやってきた。手にはお盆を持っている。

「僕は魔物じゃないけれど、人形に命令をして意のままに操ることができる。こうした異能があれば簡単なことじゃないかな。しかし勇者が乗っ取られ、国教会の治療師まで操られているとは——世も末だね」

レストウイックのカップを受け取った給仕人形は、今度は私達のそばに寄って『空イタカップヲ、

ドウゾ』と顔のない楕円形の頭をわずかに傾げた。

「ありがとうね、お利口さん」

『……オリコウサ？』

給仕人形は沈黙した。私の言葉がわからなかったんだろう。

「人形に礼を言ったのは、君と、あのカナエくらいだな」

レストウイックは軽く笑って窓の外を見た。

「異世界というものに僕は興味があつてね？ 彼女を招待して、ここで彼女の故郷について色々尋ねたことがある。大抵の人間はこの人形を気味悪がって近寄らないが、彼女は可愛いと褒めてくれたよ。彼女の故郷に魔法はないが、代わりに優れた技術があるらしい。こういった人形が、街の至るところにある、と……」

私は曖昧に頷いた。前世の記憶があるから知っているけど、そのことは秘密にしている。

「カナエも、無事に見つかるといいけれど」

フェリシアの意見に「それは賛成しかねる」と言って、レストウイックは私達を見た。

「カナエと一緒にアンガスに赴いた青年は、侯爵家と縁続きの人間だ。その青年は行方不明で、カナエには殺人の容疑もかかっている。見つからない方がいいかもね」

「そんな」

思わず抗議するような声をあげてしまった。

「ま、詳細は彼女に聞かないとわからないだろうけど」

カナエの同行者の青年もまだ見つかっていない。彼も生きていたらいいんだけどな、と黙っていると、レストウィックが器用に片方の眉を跳ね上げた。

「おや、噂をすれば、だ！ 侯爵家の本流の方がいらっしやっただ」

本流……？ 侯爵家の？

なんのことです、と聞く前にレストウィックが立ち上がった。そして軽く手を上げて、高らかに宣言する。

「隠れる！」

「わっ！」

「きゃあ！」

バサバサと風が吹いたかと思うと、積み上げてあった本達が意思を持った鳥のように舞い上がり、いつの間にか現れた壁一面の本棚に自らダイビングしていく。

瞬間に床は綺麗になり、本棚には整然と魔導書が並ぶ。ごく普通の執務室になったその部屋で、私はボカンと口を開けた。こんな短い時間に、嘘みたいな早変わりだ。

レストウィックが指を鳴らすと、本棚は消えてただの壁に戻った。

……私も聖女だなんだともてはやされることが多いけど、レストウィックの魔力にはすさまじいものがある。

「レディが来るなら片付けないといけないよね？」

「最初から片付けておいてください。私をなんだと思っているんです？」

「気だけ強い小娘」

小憎らしく両手を広げたレストウィックを見て、フェリシアが額に青筋を立てる。レストウィックは扉に向かいながら、体を少しだけ振り向かせた。

「淑女として扱ってほしければ、もう少し冷静さを保つことだね、フェリシア。君は魔導士にしては感情に波がありすぎる」

「……肝に銘じます」

フェリシアは何か言いたそうだったけど、諦めたように謝罪した。誰かがノックするより前に、レストウィックが扉を開く。

「お邪魔するわ、団長」

「お待ちしておりましたよ、レディ」

「貴方にばれないように足音を忍ばせて来たつもりだったけど、全然だめね？」

「私が貴女様の気配に敏感なのです、麗しのアンナマリー」

先程の横柄な態度が嘘みたいに、レストウィックはしおらしく挨拶した。

『麗しの』アンナマリー。

魔導士団の団長が口にした言葉は……全くお世辞ではなかった。艶やかなストロベリープロンドは、まるで金の粉でもまぶしたみたいに輝いて、緑色の瞳は綺麗なアーモンド形。

何より陶器みたいに白い肌にはシミ一つない。思わず彫像が動いたかのような錯覚を覚える、そんな美女だった。

私の不躰な視線に気づいたのか、美女がこちらを向く。
フェリシアがソファから立ち上がって頭を下げ、私も慌ててそれに倣う。

「お話し中だったのかしら？ フェリシアの横にいる方には初めてお会いするわ」

「私の客人です、レディ」

レストウィックが紹介してくれるかな？ と思ったけれど、彼はにっこりと笑うだけで何も言わない。

とはいえ、高位の人に自分から名乗るのは失礼だろう。

困惑して沈黙したままでいると、レディは扇子で口元を隠した。

「私は、アンナマリー・ド・ディシスといいますの。貴女はどなたかしら？」

「お会いできて光栄です。私はリーナ・グランと申します、お嬢様」

アンナマリー様は私の名前を聞いて、「まあ！」と一声あげた。その背後にいたお付きの二人のうち、年輩の方の女性が、鋭く私を睨みつけた。

ええ？ なんだろう、このピリピリ感。

「リーナ・グランさん……。アンリ様の幼馴染で、聖女リーナ……？」

それは私への問いかけというよりも、確認だった。

アンリの名前が出た途端、お付きの人の目が険しさを増す。

嫌な予感がして背中に汗が伝う。

「聖女とは大げさです。ただの治癒師をしております」

私が答えると、アンナマリー様は扇子で口元を隠したまま「うふふ」と笑い、緑色の目を猫みたいに輝かせた。

「まあ！ 貴女がそうなのね？ 是非お会いしたかったの、お会いできて嬉しいわ！」

「あ、ありがとうございます」

「……後日ゆっくりね？」

もう一人のお付きに何事か囁くと、アンナマリー様はレストウィックを伴って退室する。

残された私とフェリシアは頭を下げ、はーっと息を吐いた。綺麗すぎて緊張するな、あのご

令嬢。

「お嬢様は……」

「わっ！」

若い方のお付きが目の前にいて、私は叫び声をあげた。

まだいたんだ!? 気配がなかったよ！ 全く！

「あ、あの、何か？」

黒い服を着た侍女らしき女性は、胸元から封筒を取り出した。

「な、なんですか？ これ」

「侯爵令嬢アンナマリー様は、今度の満月の夜にささやかな茶会を開かれます。これはその招待状です」

「へっ……？ 茶会？」

「お嬢様は貴女をご招待したいと仰せです。必ず出席なさいますように」
「そんな、いきなり言われても！」

「侯爵家の誘いを断るに足る予定が何かおありですか？」

……ありませんけども。

言葉に詰まっていると、侍女は私に封筒を押しつけ、「それでは」と慇懃無礼に去っていく。

横暴だあ……！

私は苦い顔をしたままフェリシアと共に、執務室に取り残された。

侯爵家の茶会!? そんなの行きたくないよ！

王都に来たのは王太子様にお会いして、シャルルの行方を追うためだ。侯爵家の茶会になんて、参加している場合じゃない。

——のだけだ。

「アンナマリー様は侯爵家のご令嬢だし、顔も広い方だから、友好を深めるのは悪くない、と思うわよ？」

フェリシアの屋敷に戻った私は、例のお誘いのことで頭を抱えている。

「断っちゃ駄目かなあ」

「何か含むところがあると思われたら損ではない？」

私は再び頭を抱えて、仕方なく招きに応じることにした。

侯爵家に行くようなドレスなんて持ってないんだけど！

アンナマリー様の姿を思い浮かべてますますため息をつきたくなる。ド派手な深紅のドレスを着こなせるとは、侯爵令嬢、恐るべし……

アンリと何かありそうな美女か。

私には関係ないけど、モヤツとする……

「……すごい美人だったけど、どんな方なの？」

フェリシアは私の問いに、うーん、と首を傾げた。

「福祉活動に熱心で、聡明で、お優しく……評判のよろしい方だけど」

だけど、という言葉のあとには、ろくでもない文言が続きそうだ。フェリシアが眉間に皺を寄せる。

「我が性悪団長様と、ものすごく仲良しなのよね……」

レストウィックのこと、そんな風と呼んでいいのかな。

「私、エルフの方に初めて会ったよ。レストウィックは純血のエルフだよね？」

何代か前の国王が魔族やエルフといった亜人を嫌ったので、彼らはハーティアを追われた。そのせいで純血の魔族やエルフは、この国にはほとんど存在していない。

「そうよ。見た目は可愛らしいけど、中身はアレですからね……アンナマリー様がリーナを茶会に呼んだのも、何か意図があるのかしらね？」

私はレストウィックのいかにも食えない笑顔を思い出した。

十五歳くらいに見えたけど、本当は何歳なんだろう。

「そういえばレストウィックと随分親しそうだったね」

「アンナマリー様が子供の頃から付き合ひがあるらしいわよ？」

へえー、と思っていたら、コンコンと窓を叩く音がした。

うん？ と私達が視線をやると、二匹の猫がにやーと鳴いている。私は彼らを迎え入れるために窓を開けた。二匹がぴよんと飛んで中に入ってくる。

「みーちゃん、ミケちゃん！ おかえりなさい」

『ただいま帰ったのである、盛大に迎えるのである！』

『おなかすいたにゃ！』

アンガスからついてきた猫又は、今は気ままに王都の街を探索している。

王太子殿下に会うときは連れていこう、と思っているけど、今はおうちで待機だね。

ミケちゃんが、によーんと伸びる。それを抱き上げて私はため息をついた。

うう、もふもふ癒されるよ。

「貴族の集まりって何を着ればいいんだろう」

「私のドレスでよければ貸すわよ？」

「……お世話になりっぱなしで申し訳ない。よろしくお願ひします」

はあ、と再びため息をついたところで、私の石版タプレットにアンリから連絡があった。私が石版タプレットに触れると、掌サイズ手のひらのアンリの映像が現れる。

数日ぶりの幼馴染幼なじみの姿に、ほっと息をつく。そんな私にアンリは笑顔で手を振り、とんでもないことを言った。

『アンナマリーの茶会に行くって？ 彼女が楽しみにしてたぞ』

「……!? どこで聞いたの？」

『うん？ さっき王宮で会った。というか、毎日会うからな、最近』

なんだか脱力した。私は石版タプレット越しでさえ久々に会うんだけど、アンナマリー様とは毎日会うわけですわね!?

『俺も遅れて参加するから！ 茶会で会おうな』

「え!? 待って、アンリ!」

プツン、と音を立てて小さなアンリは消えてしまった。フェリシアが私を気遣うように「実は」と打ち明ける。

「アンナマリー様は、アンリ様との婚約婚約の噂うわさがあったのよね」

「なんとなく、そんな気はしてた……」

あれかな。茶会に呼び出されて、『貴女はアンリ様に相応ふさわしくありません!』とか高笑いされちゃうのかな。

そんな関係じゃないんだけどなーと思いつつ、私はがつくりと肩を落とした。

フェリシアがきつと似合うと言って貸してくれたドレスは、若草色をしたシンプルで品のいいも

のだった。

同行者を一人連れてきてもいい、とのことだったけれど、フェリシアは直前にレストウィックから呼び出されてしまい、私は単身でお茶会に行くことになった。

「お待ちしておりました、グラン様」

髪をオールバックに撫でつけた執事さんが広間へ案内してくれる。目立たないようにそっと入室したにもかかわらず、目敏い^{めびと}ご令嬢が扇子^{せんす}を口元に寄せてお仲間に囁^{ささや}いた。

「あの方、初めてお見かけするけれど、どなたかしら？」

「ああ、彼女？ 平民だが、有名な治癒師のはずだ」

「平民？ どうして平民が侯爵家に？」

「治癒師だから、国教会がらみの寄付のお願いに来たんじゃないかな？」

……たまたま聞こえているのか、わざと聞かせているのか。

どちらにしろ、針のむしろだな。

「知らないの？ あの方、アンリ様にひつついて王都に来たのですってよ」

「伯爵にはアンナマリー様がいらっしゃるのに、身の程知らずよねえ」

もう無理。アンナマリー様に挨拶だけして、さっさと帰ろう……

私がつめ息をついていると、突然声をかけられた。

「ようこそおいでくださいました。聖女リーナ」

「はい！」

驚いて振り返ると、ストロベリーブロンドの美女が現れた。

美しい髪を背中に流し、抑えた黄色の生地に同系色の糸で花々が描かれたドレスを着こなしている。髪飾りも同じデザインで、周囲の人々が見惚^{みと}れているのがわかった。

……気配を全く感じなかったんですけど！

「お招きにあずかり光栄です、アンナマリー様」

「急にお招きして申し訳なかったわ」

「いえ、とんでもございません」

私達は微笑み合い……なんとも不自然な沈黙^{しんもく}が落ちる。挨拶さえすればどこかへ行ってくれると思つたのに、アンナマリー様はにこにこ私に微笑みかけているばかりか、がしつと意外に強い力で私の手を取っていた。

「逃^{のが}さないわ……」

そんな声が聞こえた気がして、私はきよるきよると左右を見回す。ち、違うよね、今のドレスが利いた声は空耳だよね？

戸惑う私に、ご令嬢はさらに微笑んだ。

「せっかくいらしてくれたんですもの、屋敷を案内したいわ」

行きたくない！ と拒否するには周囲の目がありすぎる。私は諦^{あきら}めてアンナマリー様に従い、二人で広間を出た。

背後には私に招待状を渡してくれた侍女もいる。アンナマリー様は広間からさほど離れていない

部屋に私を連れ込むと、「お座りになって」と椅子を勧めた。

「あの、何かご用でしょうか？ 私は特にお話することは……」

彼女はフツと不遜に笑い、私の前の椅子に腰かけた。緑色の瞳を細めて私を見る。

「もうすぐ、伯爵がここにいらつしやるわ」

「……アンリのことですか？」

「ええ、そう。伯爵が来たら、貴女の口から彼に言っしてほしいセリフがあるの」

非の打ち所がない美女は、侍女に命じて何やら折りたたんだ紙を受け取る。

アンリと婚約の噂がある侯爵令嬢が、私の口からアンリに言わせたいセリフ？

私とアンリは単に幼馴染だけ、彼女が変に誤解しているのなら、内容は想像がつく。

「誰かに強要された言葉なんて、私は言いません。言いたいことがあるなら、ご自分で言えばよろしいのではないですか？」

きっぱり拒否したら、アンナマリー様は扇子をぼちん！ と閉じて深くため息をついた。

「私が言ってもなんの効果もないわ！ これは貴女が言うべきなのよ！ とりあえず、お願いだから読んでみて！」

紙を押しつけられ、私はちよつとムカつとした。強引な人だな！

そこまで言うなら読んであげようじゃない！

紙を開いて、流麗な文字で書かれたセリフを読み上げる。

『ねえあんりたすけて。このあんなまりさまが、わたしをつきおとそうとしたの』

『なんだつてりーな、ゆるせない。あんなまりー、あなたとのこんやくははきだ』

………ん？

………んんん？

予想外のセリフに、脳内の処理が追いつかない。固まった私をよそにして、アンナマリー様は口元に手をあてた。

「あら？ それ違うわ、二枚目のセリフだわ！ ロゼッタ！ 一枚目の紙を！」

「はい、お嬢様」

「ごめんなさいね、リーナさん。読んでいただきましたのはこちらよ」

「え？ はい？」

アンナマリー様はごそごそと文箱の中から紙を漁って、うきうきとしながら私に手渡した。

「はい、読んでちょうだい」

………気が進まないけど、ここは読むしかない。

『ひどいあんなまりさま。わたしをかってによびつけて、こんなひどいことをするなんて。あんまりです。きぞくだからって、やっていいこととわるいことがあるわ』



ほわっと？

私が内容を理解できずに固まっていると、麗しのアンナマリー様が、はあっと天井を仰いだ。

「だめね！ ぜんっぜんだめ！ 貴女、全く演技の才能がないわ！ もっと情感を込めて！ 抑揚をつけて！ エモーショナルに言ってみようだい！」

固まったままの私に、アンナマリー様は指揮でもするみたいに指を振ってみせた。

「さんっ！ はい！」

ええええええ？

なんか、思っていたのと展開が違う！

「昔々あるところに、寄り添って暮らす少年少女がいました。二人は将来を誓い合っていました。少年は家庭の事情により少女と引き裂かれ、一人さびしく王都にやってきました。新しい暮らしにもすぐに馴染みただけれど、少年はずっと少女を忘れずにいました。やがて少年は伯爵になり、少女と再会しましたが、連れ添って幸せになるには、障害があったのです……。なんだか、おわかりになる？」

「さ、さあ……」

戸惑う私にアンナマリー様は、ふっと笑った。

「伯爵には、美しく賢い、親の決めた美しい婚約者がいたからです！ その婚約者とは、何を隠そう、このワタクシ！」

「今、美しいが二回ありましたけど……」

「異論がおあり？」

「あ、ないです」

私はブンブンと高速で首を横に振った。

女神もかくやくという美貌のご令嬢は扇子を広げて自分を扇ぐ。

何を隠そうって、隠す気ないじゃん!!

内心のツッコミもむなしくアンナマリー様はなおも続けた。

「ト・に・か・く、愛し合う二人の前に立ちほだかる障害があったのよ！ 高慢ちきで美しい侯爵

令嬢がね！」

美しいってのは絶対外さないんだあ……？

ツッコむのも忘れてアンナマリー様を眺めていると、彼女は立ち上がって両手を広げた。

狭い部屋がなんだか劇場みたいになる。

「平民で治癒師の少女は、貴族の令嬢に虐められ、傷つくの！ そして少女の訴えを聞いて憤っ

た伯爵は決断するのです！ 侯爵令嬢への断罪を……！」

私は、一枚ずつナンバリングされたアンナマリー作『断罪への道』の台本に視線を落としました。

その頭が痛くなるような内容を要約すると、次のようになっている。

1、私がアンナマリー様に意地悪をされる。

2、アンリがそれに気づいてアンナマリー様に婚約破棄を突きつける。

3、アンナマリー様はアンリと決別。

4、アンリと私が新天地（つてどこですか！ それ！）に旅立つ。

「どうお思いになる？」

いやー。どう、と言われてもな……

私の頭の中に、あるイメージが浮かんだ。お馬さんがぱっかぱっかと蹄の音も高らかに、草原の中を駆けていく。

次いで、見事な角を持つ鹿さんが、森の中を疾走するシーンも鮮明に浮かび上がってきた。

草原の、馬。

森林の、鹿。

うま……、しか……、馬……、鹿……

ば……

「ちよつと！ リーナさん！」

「はい!？」

「貴女、今何か失礼なことを考えていたわね!？」

「いや、そんなことは、全く!? あんまり!? ありませんっ」

「本当かしら?」

私はコクコクと頷いた。

「……お気をつけになって！ 雰囲気でわかりますからね、そういうのは」

「……はあ」

視線を彷徨さまよわせていると、無口な侍女さんと視線がかち合う。

彼女はいたって真剣な表情で、重々しく頷いた。

「仰おつしやる通りです。リーナ様、貴女の脳内に浮かんだ言葉は失礼です。マリー様は決して、『馬と鹿』なのではありません。頭のネジが二、三本緩ゆるんでいるだけです」

「そうよ！」

そんなドヤ顔で言われましても……

「あー、アンナマリー様……」

「長いからマリーでいいわ」

につこりと微笑まれて、私は「はあ」と頷いた。

アンナマリー（もう脳内では『様』をつけなくていい気がしてきた）は緑色の瞳を細めて鷹揚おつように微笑んでいる。

「そのー、つまり諸々もろもろ解釈いたしますと、マリー様はアンリ……伯爵との婚約のお話があり、それに対して乗り気ではないと……？」

アンナマリーはふう、とため息をついて扇子せんすを広げ、再び自身を扇あおいだ。

「私が乗り気であるかないかはこの際関係ないわ。王族に連なる伯爵様と、侯爵家の娘である私。」

夫婦としては申し分ない組み合わせですけど、私、愛し合う二人の仲を裂くような趣味はありませんのよ？ 他人の恋路こいじを邪魔する人間は、馬に蹴られて死んでしまうのでしょうか？ おお、怖い！ ……それにアンリ様って全然好みじゃないし」

最後のが本音だな、絶対！

私がかぶりを振った。

「誤解です！ ……その、私はアンリの単なる幼馴染おきななじみに過ぎないので、マリー様が婚約をしたくないのなら、私に関係なく解消すればいいと思います」

「ふーん、そう？」

アンナマリーは目を細めて続けた。

「私、黒髪の男性って好みじゃないし、詩を読むよりドラゴンと遊ぶのが好きな殿方はお断りなの。いつも朗ほからかな笑顔をしているけど、裏で色々と策略を巡らせている伯爵は、なかなか腹黒ぐろで御ごしがたくて結婚相手としてはいかなものかなー、とも思うのよね。あの笑顔が胡散臭うさんくさいというか」

あんまりな評価に私は思わず反論した。

「そんなことないと思います！ アンリの黒髪は艶つややかで綺麗だし、ドラゴンと意思疎通ができるなんて心優しい証拠です！ 色々たくら企くらんだりは……昔からしていますけど！ それは、常に最善の方法を選ぶうとしているからで！ 笑顔だって……、辛くても笑っていれば元気が出るからって！ そういう……」

私は、はっとして口をつぐんだ。

アンナマリーが口元に扇子をあてて微笑んでいる。

「……単なる幼馴染、にしては随分とお詳しいですこと！」

……！ わざと言われた!?

私はフェリシアが上司を評価するのに使った言葉を思い出し出していた。
すなわち、性悪!! と。

「ひよっとして先日、団長のところにおいでになったのは……」

「もちろん、貴女が来るってレストウィックに聞いたから会いに行ったのよ。招待状をお渡ししたかったし。レストウィックはね、私の友人なの。今回のお芝居についても相談したら」

「したら？」

「貴族のゴシップなんて面白そうだから、派手にやれ！ って大笑いしていたわ。彼、退屈が嫌いなよね。レストウィックが書いてくれた台本もあるんだけど……」

なんだそれ！

私は思わず目を剥いた。

「そんなものまであるんですか？」

「ええ。でもアンリ様が後頭部を強打されて記憶喪失になるから、それはちょっと危険かなあと思ってお蔵入りさせたのよ。お読みになる？」

ちよっとどころではない。

アンナマリーの合図で無口な侍女が音もなく背後に立つ。

その手に用意された百枚はありそうな紙の束に、私はつい真顔になった。

いつ書いたの……。暇人なの……？

「やめておきます……」

「そう？ ロマンチックでいい台本なのだけれど、私もリーナさんに刺されてしまうし、ちよっと遠慮したい案なのよね……」

「刺しません！ とんでもないことを言わないでください！ 私は治療師ですよ！」

「そうよねえ、職業倫理に反するわよね、ごめんなさい」

シユンとするアンナマリーに、謝るのはそこお？ と脳内ツッコミを入れつつ痛むこめかみを押さえた。

団長って、ろくでもない！ 友達だからじゃなくて、単に楽しそうだったから乗っただけじゃないかな……

「とにかく、私は演技が下手ですから、アンナマリー様と……」

「マリーとお呼びになって？」

上目遣いで可愛く言われて、私は反論を諦めた。

「……マリー様とアンリの婚約破棄にお力添えはできませんから！ ……それに、こういうものはお二人が嫌だと言えば、破棄できるものではないんですか？」

今度はアンナマリーが真顔になる番だった。

彼女は扇子を広げて深いため息をつく。

「事情がありますの」

そう言つて、昔語りをするみたいに説明してくれた。

ハーティア王国を治める国王陛下には美しい王妃様がいらつしやる。お二人の仲は睦まじく、一男一女を授かった。王太子殿下と、少し歳の離れた妹姫だ。

国民が羨むこの幸せそうな家族に激震が走つたのは、五年ほど前のこと。国王陛下に庶子がいるとわかつたのだ。国王陛下はその少年を認知して王都に迎えた。

それがアンリだ。

「アンリ様は聡明でお人柄も朗らか。剣技も優秀な方です。けれど王族としては……何が足りないかおわかりになる？」

「……それは」

私が言い淀むと、アンナマリーは扉を見た。

侍女が私達から離れ、扉の前に移動する。人が入つてこないようにするだめだろう。

「ここには私達しかいませんわ。どうぞ忌憚なくご意見をどうぞ」

「……お母様の身分、ですか？」

アンリのお母様はアンリを産んで、すぐお亡くなりになつたらしいけど……

アンナマリーは頷く。それから申し訳なさそうに目を伏せた。

「先程、広間で貴女に無礼なことを言つた方々がいたわね。そのことについてお詫びいたしますわ、リーナさん。ごめんなさい。不快な思いをなさつたでしょう？」

「……いえ」

私が苦笑すると、アンナマリーは続けた。

「アンリ様の母上がどんな方だったかは、彼に直接お聞きになつて？ 貴族ではなかった、とだけ申し上げますわ。ハーティア国の貴族は、とかく面子や家柄を重んじるもの。情けないことですけどもね。陛下でさえ例外ではなく、不遇なアンリ様に唯一足りない家柄というものを、私との結婚で補うことを望んでいらつしやいますの。王位を与えるわけにはいかなないご子息に、せめて後ろ盾を用意したいと」

「……そこまで私に話していいんですか？」

「よろしいんじゃないくて？ 私、先程も申し上げた通り、伯爵夫人になる気は全くありませんから」

アンナマリーはカップを置いた。

私は上等なお茶を飲んでから、ちよつと首を傾げる。アンナマリーの立場で、それは許されるだろうか。

「その、それはアンリが好みじゃないから、ですか？」

「もちろんそれもありますけれど！」

アンナマリーは目に力を込めた。

それから気のせいかな、ちよつとだけ涙ぐんだように見える。

「不遜を承知で申し上げますれば、国王陛下がアンリ様に不遇の埋め合わせをなさりたいのなら、ご自

身でされるべきだと思えますわ。安易に私という駒を与えて安堵するのではなく！ ……私は褒美でも、格付けのための置物でもございませぬ」

そう言つてアンナマリーは私を見た。

「私は貴族ですから、最終的には陛下のご意向に従いますわ。臣下の一人として。アンリ様もそうなさるでしょうね。…そうすれば、不幸な夫婦の誕生ですわ」

「不幸になるとは限らないのでは？」

私の言葉を、アンナマリーは確信をもつて否定した。

「不幸に決まっているわ！ 私達、どちらもお互いに一切、恋愛感情が持てませんでしたの。もちろん恋愛感情なんてなくても夫婦にはなれますわね。そんなこと、よく存じております。…けれど、私は進んで不幸になりたくはないし、アンリ様も不幸にたくはない。貴女だって、不幸になるのは嫌でしょう？」

急に話を振られた私は、目を逸らして口ごもる。

「わ、私は平民なので関係ないかな、と」

アンナマリーは可愛らしく口を尖らせ、仕方ないとばかりに肩を竦めた。

「言い逃れするなら、それでもよろしくてよ…！ でも、覚えておいてくださる？ 周囲がどう言おうと、私はアンリ様と結婚するつもりはないの。…それは私にとつて、とても不幸なことだから。抵抗できる限りは抵抗するつもりよ」

緑色の綺麗な瞳に見つめられて、私は思わず頷いてしまった。

彼女にも色々事情があるのだろうか。

「わかり、ました」

「今はそれでいいわ。さて、それでは私と一緒に挨拶に回りませんか？ せっかくだから今日のゲスト達にご紹介したいわ」

そう促されたので、私はウツと言葉に詰まる。

平民、身の程知らず…と囁かれた陰口にはちよつとムカツとしたけど、やつぱり怯んでしまうあの悪意に満ちた好奇心の中に戻るのには、気持ちいいものではない。

けれどアンナマリーはニコニコと微笑んで私の手を取った。

「私と仲良しだと匂わせておけば、周囲の雑音は減りましてよ？」

「なかよし!?」

いつの間にかそんなものに？

私が半眼になつていると、アンナマリーは人の悪い笑みを浮かべた。

「二回会つたらお友達なのよ？ よろしくね、リーナさん。…逃げさないわよ…私の幸せのために、貴女には覚悟を決めてもらいますからね…」

「心の声が漏れていますけど、マリー様…」

「あら、いけない。ほほほ」

——と言うわけで、私はアンナマリーに促されて広場に戻つた。

笑顔のアンナマリーと愛想笑いの私が一緒に戻つてきたので、一瞬、広間がざわめく。しかしな

から、貴族の皆様はボーカーフェイスが上手で、すぐに私に笑顔を向けてきた。

ひと通りの人に紹介されたところで、また人々の間に緊張が走る。

何事かと思えば、髪を後ろに撫でつけたアンリがジュリアンと一緒に現れたところだった。

「アン……ベルダン伯爵。ごきげんよう」

そう言ったら、アンリは『おや？』とばかりに私を青紫の瞳で見た。

それからアンナマリーの手を取って軽く口づける。

「ご機嫌麗しく、マリー」

「アンリ様も」

にっこりと微笑み合う美男美女はどこから見てもお似合いの二人で、なんとなく居心地が悪い。

続いてジュリアンがマリーに挨拶した。

「ジュリアンはアンリ様が同行しないと、侯爵家に寄りつきもしないのね」

「まさかそのようなことは。恐れ多いだけでございます」

「そうかしら？」

アンナマリーは私の手を素早く取ると、そのままアンリに渡した。

「マリー様？」

私はたじろいだけれど、アンリは涼しい顔でがちりと私を引き寄せる。目を剥いたジュリアンの腕にアンナマリーがぶら下がった。

麗しのアンナマリーの力が強すぎるのは、私もさつき知った。ジュリアンの動きも見事に封じら

れている。

「ジュリアン、あちらで私と楽しくお話ししましょう？」

「待つ、アンナマリー様、私はお話しすることは……」

「わ・た・く・し・が、ありますの！ では、お二人は楽しまれてね？」

アンナマリーに半ば引きずられるようにして、ジュリアンが離れていく。本当、見た目にそぐわない怪力ですよね……

「アンリ様、手を放していただきたいんですけれど」

「これは失礼、リーナ殿。帰らないって約束してくれるなら。じゃなきゃ場がお開きになるまで、

このままで」

「……わかった」

どう考えてもこのままでは、周囲からの視線が刺さって痛い。

私のため息まじりに頷くと、アンリはほっと息をついた。

「久しぶり。アンナマリーと仲良くなった？」

「そこまでは……、でもなんだか憎めない方だね。なんか、こう……想像していた侯爵令嬢のイメージとは違うというか」

ちよっと夢が壊れたというか。

小声で言うとう、あはは、とアンリが笑った。

「確かに！ だけど、そばにいて、息がしやすいんだよ。俺がここに来たばかりの時も、わかりづ

らくも親切にしてくれたし……」

「わかりづらくも、つてのは想像つく気がする……」

「だろっ？」

息がしやすい、か。

他の人といるときはどうなのかな？　と思っていると、アンリが「何か飲み物を持ってこよう」と離れていった。

途端に、近くのテーブルにいた女性のグループがざわめく。

「……伯爵だけでなく、アンナマリー様にも馴れ馴れしくするなんて！」

「平民は礼儀を知らないのよ」

「……気分が悪いわ。せつかくのお茶の味もわからなくなりますわね。どこかへ行ってくださらないかしら」

私が視線をそちらへ動かすと、ご令嬢達は扇子で口元を覆って黙り、クスクスと喉を鳴らす。ここが招かれた場でなければ売られた喧嘩を買ってもいいけど、アンナマリーにもアンリにも恥をかかせるつもりはない。

私は彼女達のお望み通り、バルコニーに居場所を移した。

椅子に座って、アンリが戻ってくるまで少しクールダウンしよう。

「わあ、絶景！」

バルコニーから見下ろす侯爵家の庭は整然としていた。噴水が涼しげな水音を立てて耳も目も楽

しませてくれる。

こんなに綺麗なのにな、と私はちよつと悲しくなった。

平民、エルフ、魔族。それに、異世界からの客人。

ハーティアは美しい国で、好きだけど。貴族の屋敷はこんなにも美しいけれど。

そこから弾かれる人々もいて、自分もその中に入るんだなあとと思うと、少し切ない。

シャルルに宿った魔物も伝承に書かれていた通り、王家の始祖と友達だったのに裏切られたとうならば。彼に恨みを持ち、絶対に許さない、と思っているのならば……

「魔物と友達の間には、何があつたんだろっ？」

「こんな静かな場所に相応しくない、物騒なセリフだ」

「ああ、アンリごめん……」

アンリの声に振り向いた私は、口元に手をあてた。違う、アンリじゃない！

「失礼しました」

「いいえ？」

三十前後の品のいい男性が微笑んでいる。

彼は金髪だし、アンリと全く似ていないのに、なんで間違えたのかな。

「こんなところで貴女に再会できるとは思わなかったな」

「再会？」

「覚えていらっしやらないかな？」

私は立ち上がったって青年を見つめ……あ、と思い当たった。

王都に来たばかりの時に図書館へ行ったけど、その時、図書館を案内してくれた青年だった。

「その節は、ご親切にありがとうございました」

「いいえ。お探しのものは見つかった？」

「おかげさまで！ ……あのときはお礼もせず申し訳ありませんでした……」

私が礼を言うと、青年は微笑む。

「アンナマリー様のご友人でいらつしゃいますか？」

「ああ。彼女とは子供の頃からの付き合いなんだ。どうぞ座って。淑女を立たせて礼を言わせるのは気が引ける」

高位の貴族なんだろう。金色の髪に青紫の瞳。柔和に微笑む彼の着ている服は、黒一色のシンプルなものだけれど、よく見れば光沢のある黒い糸で細かく刺繍がしてある。

自然に、でも有無を言わさぬ雰囲気です手を差し出され、私は思わず自分の手を重ねてしまう。

柔和な外見に似合わない硬い指。その中指には銀の指輪があつて、私は何気なくその紋章に視線を落とし……ハッと息を止めた。

銀の指輪は宝石も何もついておらず飾り気のないものだった。ただ彫金で何かの模様があしらわれている。

私は視力がいい。その形を正確に把握して、肌が粟立つのを自覚した。

——七つの竜。

その紋章を身につけても許される人など限られている。

「どうかした？ リーナ殿」

私は青年から手をそつと離して、一歩後じさつた。

「ご無礼をいたしました」

アンリと同じ青紫色の瞳が私を無表情に観察している。それを確認して、もう一歩後ろに下がった。

戻ってきたアンリが視界の端でたじろいでいるのがわかる。

私はアンリも青年も視界から追い出すために、ゆっくりと礼をとつた。視線が下に向かい、首から下げている無機質な石だけが私を見返す。

「お初にお目にかかります、王太子殿下」